『語用論研究』第7号（2005年）pp.139-146
@2005年　日本語用論学会

[書評論文]

François Recanati, *Literal Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press, 2004, pp.viii + 179, ISBN 0-521-53736-3

山　﨑　英　一

1．はじめに

本書の構成は以下の通りである（節は省く）。

Introduction
Chapter 1 Two approaches to 'what is said'
Chapter 2 Primary pragmatic processes
Chapter 3 Relevance-theoretic objections
Chapter 4 The Syncretic View
Chapter 5 Non-literal uses
Chapter 6 From Literalism to Contextualism
Chapter 7 Indexicalism and the Binding Fallacy
Chapter 8 Circumstances of evaluation
Chapter 9 Contextualism: how far can we go?
Conclusion

全体としては、本書は、「字義通りの意味（literal meaning）」を捉える際に、Literalism と Contextualism という二極と、この両極をつなぐ三点、計5つの観点のいずれから分析すべきかを検討するものである。この中で本書は、最も有望であるのは、従来主流であった Literalism（あるいはそれに近い立場）ではなく、Contextualism のほうであることを主張している。

章別には、導入では前世紀の言語哲学について、及び昨今の意味論・語用論の境界について述べている。このような学問的変化の中で、本書が従来支配的であった Literalism ではな

く、日常言語哲学の流れを汲むContextualismにたつことを表明している。1章、2章は特に以降の議論に必要な考えの導入的な議論がなされており、言語分析のための道具立てに当てられている。3章は、彼の主張と近い議論を展開する関連性理論への異議を論じている。ここで彼の主張が関連性理論に属するものではないことがわかる。4章以降は、二極の立場に中間的三観点を加えた、計5つの立場の紹介、展望、問題点を論じることが中心となっており、Contextualismがもっとも有望であるとことの主張を展開している[1)]。

筆者Recanatiが（言語）哲学者であるためか、語用論の研究書とは展開が多少とも異なる。興味深い新例の紹介というよりは、むしろ理論はどうあるべきであるかということを細部から議論しているのである。しかし、同時に、語用論、特に関連性理論と近い理論観を随所に見せている。故に、この書評では割り切って、評者が多少とも理解している関連性理論の立場、特に最近のCarston（2002）を参考に本書の主張を検討したい。結論的には彼の主張の方向性自体はCarston（2002）に近い、あるいは同一である（Recanati自身Carston（2002）はContextualismを試行するものとしている）が、3章を中心に関連性理論、あるいはCarston（2002）とは異なる点が主張されている。又、以下に述べるように評者の観点からも彼の立場は重要な点で異なるものである。なお、言語哲学を中心とした観点からの批評に興味のある方はStanley（n.d.）を参照されたい。

2．Contextualism

Griceの立場では、disambiguation（曖昧性の除去）とsaturation（飽和：この場合は指示付与）により発話全体の字義的意味であるwhat is（literally）said（what is $said_{min}$）が得られる。このような立場をMinimalismとする。この立場では、発話の真理条件はwhat is $said_{min}$が担い、語用論的処理を受けるのは推意（what is implicated）のみということになる。この立場は、literalist側に立つものである。

一方、昨今の理論語用論の成果・展開から、what is saidに至る以前の段階にも語用論的処理が関与していることが有力な考え方となってきた。更にこの考え方を徹底して押し進めると、本書の立場であるContextualismへと至る。これは、発話行為こそが内容の主要な担い手であり、発話行為の文脈の中でのみ文は確定的な内容を表出する（p.3）という考えである。これは、形式的意味論を中心とする言語理論観から、Austinをはじめとする日常言語学派の理論観への揺り戻しでもある。

この立場では真理条件を担うのは、曖昧性の除去と指示付与を受けただけのwhat is $said_{min}$ではなく、更なる語用論的処理（free enrichment（自由富化）等）を受けたwhat is $said_{prag}$（関連性理論における表意（explicature））である[2)]。

3．具体的適用

具体的な例の分析ももちろんあるが、主眼が例の分析と解明ではなく理論検討にあるため、応用が見えにくい。ここでは本書の批判というよりは、本書の主張により従来の例えばグライス派の問題点をどう回避できるかを考えてみたい。具体的には Levinson（1983）で挙げられている以下の例で本書の有用性を検討しよう。

（1）a. John came hurriedly down the stairs
b. John ran down the stairs
c. John rushed down the stairs
d. John hustled down the stairs
e. John shot down the stairs
f. John whistled down the stairs

Levinson（1983）

字義通りに使われていると感じられる例から比喩的な（metaphorical）例までが字義性の度合いに沿って並べられている。ここでの大きな問題は、どの例までが字義通りの意味で使われていて、どの例からが比喩的な解釈なのか、ということである。

従来のグライス派では what is said（字義通りの意味）に基づき what is implicated が導出されるわけであるから、a ～ f のどこかで明らかな境界（例えば c までが what is said で、d からの解釈が what is implicated）があることになってしまう。実際には明確な境界を引くことは困難であることから、グライスの枠組みの本質的な問題と言えるであろう。

一方本書の立場では、what is said も語用論的処理の対象であり（what is said$_{prag}$）、故に、a ～ f のいずれでも問題となっている解釈は語用論的処理の程度の差こそあれ、質的には what is said$_{prag}$ という同一の資格をもつものとして扱うことができる。質的には同一であるのだから、境界線を引くのが困難であることが説明できる。

なお、関連性理論では'what is said$_{min}$'に理論内的な有用性を求めない立場にあり、それにとってかわる「表意」は Recanati の what is said$_{prag}$ に相当する、語用論的処理を受けている情報である。両者の違いは、関連性理論では表意の語用論的処理は推意同様、推論であるとするが、Recanati は what is said$_{prag}$ の導出に関与する語用論的処理は、推意の場合と異なり、連想による、とする点である。推論の場合は文全体の字義的な意味の同定を前提としてしまうが、連想は文全体でなくて局所的な派生であり、字義通りの命題を事前に有している必要がないとする（p.29）。確かに、典型的に表意の同定作業では、命題化以前（non-propositional form）の段階のものが処理対象となる。これを、推意導出時のような、命題（what

is $said_{prag}$ あるいは表意）を対象に他の命題（推意）を導出する場合と同様に「推論」と呼ぶのは問題があるかもしれない。が本書では連想で簡単に生じる、といった感の扱いであり、そのメカニズムは紹介されていない。又、関連性理論においては、ある情報が表意に属するのか推意なのか必ずしも区別が簡単ではないという事実の背景には、両者同様のメカニズムがあるからであると考えうるが、本書の主張ではこのことが説明困難であろう。

さて、上記のように、「字義通りの解釈」と「比喩的な解釈」とが同じ what is $said_{prag}$ であるとすると、例によっては強く感じる字義通りの感覚、あるいは逆の比喩の感覚の出所が問題となる。なお、従来のグライス派でも、両極は what is said（字義通りの解釈）と what is implicated（比喩的解釈）に対応する形で説明づけられるが、範疇的な区分による対応なので、「字義通りのようでもあり、比喩的なようでもある」中間例の直感に対応する状態が何に対応しているのかは説明できない。

このいわば「字義性」の直感をどう説明するかということになるが、語用論的処理の量的観点で捉えるならば、Carston（2002）式には ad hoc concept construction での修正労力の大小の反映として説明できるであろう。これと似て、本書の視点からは、what is $said_{prag}$ を導出する際の語用論的処理の量に関して処理が多いほど、あるいは第9章で挙げられている仮説のように、意味が定形を持たず、経験の束に過ぎないとすれば、日常の経験からの逸脱がはなはだしいほど、「字義通りではない」と感じると分析できるであろう[3)]。

4．関連性理論との相違点

以上のように、本書は、関連性理論派、特に2002を中心とした最近の Carston と非常に近い方向性と主張とを有している。そのため一部の研究者は Recanati が関連性理論学派であるとみなしているようであるが、本人自身認めるように、彼は関連性理論に属する学者ではない。両立場で相互に影響を与えているとは言えようが、実際、理論観的にも以下に述べるように、意識や直感等 personal/subpersonal な視点をはじめいくつか主要な点で大きな違いがある。Recanati 自身の関連性理論への異議は第3章で行われているが、以下ではそれとは違う点から両者の違いを見てみたい。

まず、Recanati の主張全般を支える非常に重要な原理の一つに Availability（Principle）がある。

（1）Availability

What is said must be intuitively accessible to the conversational participants (unless something goes wrong and they do not count as 'normal interpreters').

この原理を支える考え方は、コミュニケーションにおいては話し手の意図を把握することが必須であり、このことから伝達されること（what is communicated）（what is said 以外に what is implicated も該当する）は意識化できる（consciously available）というものである。

この原理を有効とする'normal interpreters'の規定が問題となるであろうこと以上に、ここでの考え方の最大の問題点は、直感や意識という観点から分析することが妥当か、という点であろう。例えば関連性理論でいう推意前提は一般に意識できない。意識できるのは通常表意と推意結論のみなのである。意識的に利用可能かどうかと関係なく理論作られている関連性理論では推意前提は非常に重要な理論概念であり、この点だけでも両立場が非常に異なることがわかる[4]。

又、知覚や認識を分析する認知理論（言語理論も本来ここに含まれてよいと考えられる）では意識に基づいて理論を構築するのではなく、意識を説明できるような理論の構築を目指す。つまり意識を基盤とするのではなく、意識は処理情報の一部モニタリングであると解釈する。Carston（2002）の主張も含めてまとめれば、認知理論は subpersonal な観点からの分析・記述を試み、意識可能性は中核的概念ではない、ということになる。一方 Recanati の観点は、personal な観点からの、意識可能性に重責を与えるものである。これは関連性理論や他の認知理論と明らかに異なるものであり、ある意味あまりに哲学的である[5]。

もう一点根本的に違う、あるいは関連性理論と比べて問題であると考えられる点を挙げよう。Stanley も指摘するように、本書の分析・主張では、解釈を規制するメカニズムや原理がない。つまり、関連性理論には関連性の原理という統一的規制原理と認知機構というメカニズムがあるが、Recanati の枠組みでは実際の解釈がどのように得られているのか、どのように制約されているのかがわからない。つまりは「文脈次第でなんでもありの語用論」となってしまう危険性すらあるのである[6]。

Recanatti は今後も関連性理論に影響を与えたり解くべき課題を指摘するであろうが、personal レベルに基づく Availability を主張する限り、Recanatti が関連性理論派と統一的理論へ歩むことはありえないと考える。結局このことは、誇張した言い方をすれば、Recanatti の研究の枠が哲学を離れない一方で、関連性理論が認知理論志向であるということかもしれない。

5．おわりに

全体としては personal レベル（Availability）の立場から minimal proposition（最小命題）としての what is said の存在を否定するものであり、Contextualism の可能性を大いに進めようとするものである。

なお、実際には、Recanati が述べるように、言語的情報に基づく義務的操作である saturation の機能を強化することで、反対勢力である literalist 側の主張を強めることができる。例えば、代名詞の指示付与にとどまらず、時や場所等指標的に分析しうる情報も扱うように機能を拡大することで、本書が自由富化つまりオプショナルな語用論的操作としていることが、実は言語的情報に基づく saturation であることになる。そして、語用論的操作の結果得られたと主張したい命題（真理条件を有する情報）が、結局は言語情報に基づく意味論の段階で得られるものであるとすることができる。つまり、命題はやはり語用論ではなく意味論の範疇に属するという立場と、彼の、命題は意味論の段階ではなく語用論の問題であるとの立場とはまだまだ紙一重なのである。

以上のような Recanati の論点は、結局は真理条件を決定するのが言語か意図かという問題である。又、文の真理条件が解釈過程においていつ成立するのかが'what is said'が意味論・語用論どちらの領域の概念であるのかを決定付ける。が Robyn Carston（2002 個人談話）が言うように「一つには真理条件や命題という理論概念を使うのは、他に有効な代替案がない」からであるとしても、真理条件が人間に特定できるものであるのかどうか、あるいは真か偽か把握できるのかどうかという根本的なことも踏まえて、真理条件を中核とすることの必要性が再吟味されるべきであると言えるかもしれない。

上記のことからも、又、Recanati 自身認めていることであるが、本書は Contextualism の正当性を理論上証明しきれているわけではない。又、彼の主張を支える原理群は基本的に personal な種類のものであり、認知論的には疑問であるものが多い。しかしながら、この立場の将来的展望はかつてよりははるかに明るく、又、（細部はもちろん異なるが）Carston（2002）等でも示されるように、理論語用論の代表理論である関連性理論が志向あるいは模索しつつある立場でもある。Grice により大きく方向付けられた理論語用論。当初の、日常言語は論理学での論理と実質等価なものであり、実際の動きの違いは会話の諸原則によって説明できるというスタンスは、日常語における論理性は、所詮、日常語の幾多の作用の中に強引に見つけた規則性に過ぎず、実際には論理学におけるそれとは異なるという方向へとシフトしていくのかもしれない。つまり、我々は、単なる揺れ戻しではなく、更に大きな、パラダイムシフトの時を迎えようとしているのかもしれない。

最後に本書の価値をまとめるならば、次のようになろう。つまり、本書は、タイトル通り「字義通りの意味」の扱いの問題を中心に、さまざまな論点を提供している書である。理論や理論観の支持・不支持はあるだろうが、字義的意味そのものや、これと比喩的意味との境界の問題を検討する際やそれ以外にも、語用論そのものや、意味論・語用論の境界や役割分担を再考する際にも、あるいは意味の役割を拡大する傾向にある統語論や認知意味論の議論にとっても、貴重かつ重要な文献と言えよう。

注

1）本書評では5つの類全てを紹介することはない。便宜上第1類をLiteralism、反対の極であるContextualismを第5類とし、他を2～4類の形で位置づけるにとどまる。なお、原書ではこれらはIndexicalism（第2類）、The Syncretic View（第3類）、Quasi-Contextualism（第4類）という名称で言及されている。必ずしも直線上の区分ではないとしながらも、第1～3類はliteralist側であり、第4・5類はcontextualist側とされる。

2）Recanatiによれば、当初の関連性理論はContextualismの弱いバージョンと言ってよいQuasi-Contextualism（第4類）であった。関連性理論の方針を更に進めたCarston（2002）はContextualismに属するとされている。このような観点を理解するにはAtlas（2005）やCarston（2002）でのunderdeterminacy（決定不十分性）仮説の理解が必要であろう。簡単に言えば単語や文は、真理条件を供給するには全くもって情報不足であり、語用論的に補われるという考えである。

3）実はここには問題がある。日常の字義性・非字義性の直感をいつ感じるかに関しては原著では第5章で扱っている。ここでRecanatiは、人々の持つ字義性の直感をp-literalnessという概念で捉えようとする。平たく言うならばこれは推意として問題の解釈を得ているのではないことを示し、推意絡みの例（例えばアイロニー）をp-non-literalとし、この場合what is saidとは別立ての処理を受けるため「非字義的な解釈」だと感じるとしている。問題は、本書評での議論からもわかるように比喩の例は推意がらみではない故、p-literalな例であり、故に非字義性の直感を感じる例ではない、としていることである。本書評では、第9章（特にp.146以降）での、語の意味というものは存在せず、あるのは経験の束であると考えることも可能であるという仮説から、日ごろの経験から逸脱する例ほど通常の用法とは異なる直感とつながると考えてよいのではないかという形で述べている。ただこの展開もAvailabilityの原理から、what is said$_{prag}$は意識できても、導出までの途中段階の操作は意識できないことに抵触し、結局解けない問題となる可能性はある。以上のように、意識との対応度を求めるわけではない関連性理論のほうがむしろ直感との対応関係に関する説明力がある。

4）Recanatiの主張では、（意識化可能性との関連ではなく）発話意図との関連から、関連性理論における推意前提を「推意」とはみなさない。話し手の意図はwhat is said$_{prag}$や推意結論（推意）の伝達にあり、推意前提は、推意の導出に必要な、いわば推意伝達の媒介物に過ぎないからという理由である。

5）語用論におけるpersonal/subpersonalの区分とsubpersonalな観点からの分析の必要性に関してはCarston（2002）を参照されたい。なお、この理論概念に関し、RecanatiはCarstonとは多少とも異なる捉え方をしているようであり、大雑把にはconscious/unconsciousに対応すると考えているようである。意識の、認知理論における位置づけに関してはJackendoff（1987）を参照されたい。

また、このようなpersonal的な理論観は別の所にも反映されている。例えば、第7章において彼は、saturationとfree enrichmentとを区別する際の、literalist側の武器であるBinding Criterionへの代替案として、Optionality Criterion（p.191）を提案しているが、これは反例が思いつけるかどうかに依存する性質のものであり、その反例の判断に（本人は述べていないが）意識可能性が関与していると言わざるをえない。

6）述べているように、原著内に特にメカニズムの説明らしきものは掲載されていないが、Carston（2002）は、連想と推論という二つの全く異なる語用論的過程を認めている彼のメカニズムについて次のようにまとめている。まず一つは彼の言う連想のメカニズム（命題前段階的な連合的一次的プロセス（sub-propositional associative primary processes））であり、これは認知労力の考慮のみで駆動するとする。もう一つは、推意導出のメカニズムである、純粋に推論による命題的な副次プロセスであ

る。これは、Grice の標準的な格率群により導かれ、又、sub-personal な計算レベルでは明瞭に説明することはできない。この紹介においても依然規制をつかさどるメカニズムは見えてこない。

参照文献（書評内言及分のみ）

Atlas, J. D. 2005. *Logic, Meaning, and Conversation: Semantical Underdeterminacy, Implicature, and Their Interface*. Oxford: Oxford University Press.

Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.

Jackendoff, R. 1987. *Consciousness and the Computational Mind*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Levinson, S. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge Universty Press.

Stanley, J. n.d. Review of Francois Recanati's Literal Meaning. *Notre Dame Philosophical Reviews*. http://www.rci.rutgers.edu/~jasoncs/recanati2.doc